『南総里見八犬伝』初期構想の成立

石川秀巳

一　はじめに

昭和初年、芥川龍之介との間に起きた〈筋のない小説〉論争の中で、「構造的美観」「云ひ換へれば建築的美観」の備わった「『話』のある小説」を良しとする谷崎潤一郎は、「芥川君の所謂『長篇を絮々綿々書き上げる肉体的力量』（中略）の欠乏が日本文学の著しい弱点である」と言いつつ、『南総里見八犬伝』について次のように評した。

源氏物語は肉体的力量が露骨に現はれてはゐないけれども、優婉哀切な日本流の情緒が豊富に盛り上げられてゐて、首尾もあり照応もあり、成る程我が国の文学中では最も構造的美観を備へた空前絶後の作品であらう。しかし馬琴の八犬伝になると、支那の模倣であるばかりか大分土台がグラついて来る。[1]

『八犬伝』を「首尾もあり照応もあ」る何ほどか「構造的美観」の備わった作品と認定してはいるのだろう。その上で、『源氏物語』と違って「大分土台がグラついて来る」と批判するわけである。ただし、谷崎自身が『八犬伝』の「構造的美観」をどのように捉えたのか、あるいは、「土台がグラついて来る」と見る理由についても、具体的な指摘はなされないままだった。

『八犬伝』を構築的な作品と見るのが一般的な評価であろう。しかし、「構造的美観」の一側面として物語の全体構成を取り上げてみても、これまで共通の理解はなかったのではないか。結城大法会における八犬士の結集を物語の節目と見て前後に分ける二部構成説、それに対して伏姫自裁と八玉飛散に至るまでの里見義実・伏姫物語を特立した三部構成説などが提出されてきた。『八犬伝』を発端部・列伝部・京師の話説・大戦部・終結部の五部に分けて把握する私見を述べたこともある。ここでこれら諸説の是非を問いたいのではない。いずれの説にせよ、完成した全百八十一回の物語を前提とする点は共通する。けれども、こうした大枠を起筆時に立てたわけではなかったことを、馬琴は随所で明かしている。たとえば、肇輯跋文。

大約こゝに演る所は。この小説の発端のみ。これより下は八犬

士の。やゝ世に出べき事に及べり。この後又年を歴て。八士八方に出生し。聚散時あり。約束ありて。竟の里見の家臣となる。八人の列伝は。前後あり長短あるべし。まだ其処までは攷果さず。

後続する八犬士列伝の細部は、執筆につれて具体化していく予定だったと言う。無論、全体の大まかな計画はあったに違いない。しかし、当初の構想のまま三十年近くも書き続けたと考えるのがおかしいのであって、『八犬伝』は構想の変化・発展の結果として存在していると見るべきだろう。『八犬伝』の「構造的美観」を把握するためには、構想論的視座につかなければならない。

それにしても、肇輯起筆時、馬琴はどのような物語を作り上げようとしていたのか。構想の変化・発展を辿るに先立って、その起点の確認が必要である。

刊記に従うなら、肇輯は文化十一年〈一八一四〉十一月に刊行された。馬琴には別の記憶もあって、第九輯下帙下編之下結局編(天保十三年〈一八四二〉三月刊)「回外剰筆」では、「是年文化甲戌冬十二月。八犬伝第一輯十回五巻。刊行の書賈。山青堂発販す」と記す。刊記が実際の刊行時期を示すとは限らないから、馬琴の記憶を尊重すべきかもしれない。いずれであるにせよ、では、執筆時期はいつだったか。『近世物之本江戸作者部類』(天保五年〈一八三四〉成稿)では「文化十一年(中略)八犬伝初輯五冊を綴る」[2]と同年の執筆であることのみを伝える。ふたたび「回外剰筆」につけば、「文化十一年甲戌の春正月下澣。本伝の作者曲亭主人。這小説を綴るが為に。案を拭ひ硯に呵して。将新研を開まくす」とあり、刊行の年の正月下旬に起筆したという。また、序文の日付「文化十一年甲戌秋九月十九日」が擱筆の時期を示すだろう。要するに、文化十一年の正月から九月まで執筆し、同年冬に刊行したというわけである。

だが、言うまでもなく、構想はそれに先行したはずである。ならば、馬琴の『八犬伝』構想はいつごろ成立したのだろうか。林美一は早く文化五年ごろから「八犬伝」の刊行予告が繰り返されたことを指摘した[3]。以下、もっぱら林の指摘に依拠しながら、それぞれの時期において馬琴が持っていたであろう構想——そのうごめきとでもいうものを探ってみよう。

二 〈文化五年構想〉の意義

文化五年〈一八〇八〉十月刊(刊記)の『俊寛僧都嶋物語』巻之八末に「曲亭主人新著稗史目次」が載り、次のような内容の「里見八犬士異伝」予告が掲出された(図1)。

犬山犬塚犬飼犬村犬川犬坂犬田等が智勇物語　并七馬士伝

嗣[4]

ほぼ同じものが同年十一月刊(刊記)の『旬伝実実記』巻之五末にも載っている[5]。『嶋物語』序は「文化戊辰年仲夏」、『実実記』序も「文化戊辰仲夏の日」の日付を持つから、右の予告は文化五年五月当時に『八犬伝』構想が存在したことを示すはずである。この〈文化五

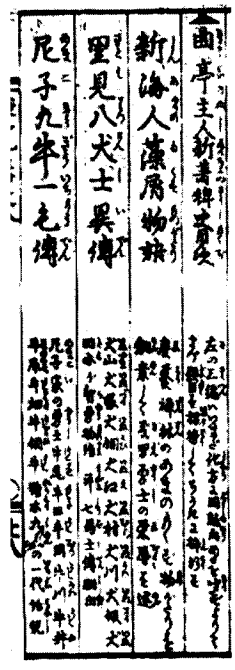

図１　『俊寛僧都島物語』巻之八 28オ

年構想〉の内実はどういうものであったか。

両書ともに次のような「尼子九牛一毛伝」の予告を併記していたことを想起しよう。

尼子家の勇士牛尾牛田牛岡牛川牛井牛　屎牛畑牛飼牛糠等九人の一代話説

さらに、書名のみではあるが「七馬士伝」も附記する（『実実記』では「尼子九牛一毛伝」予告に附記）。たしかに、これらは八犬士なり九牛士なりの姓名を列挙したに過ぎない。しかし、この時期の馬琴が類似の書名、類似の素材による読本三種――「里見八犬士異伝」「尼子九牛一毛伝」「（尼子）七馬士伝」の刊行を計画したという事実に着目するならば、そこから『八犬伝』原初構想についての手がかりを見出しうるのではあるまいか。

文化五年正月刊（刊記）『三七全伝南柯夢』巻末の「曲亭先生近日著編題目」は六種の題目を挙げる。そのうち「阿染久松伝秋七草」「糸桜赤縄奇編」「桂華秋波新語」「梅川忠兵衛大和紀行」は、ともに情死事件に取材した世話浄瑠璃を典拠とし、歴史的背景の中で始動させた物語を浄瑠璃的構図に収斂させるところに結末を用意する、〈巷談物〉の構想類型を示すもの、それによって執筆可能な素材を浄瑠璃から見出し列挙したものなのである[6]。〈八犬士伝〉〈九牛士伝〉〈七馬士伝〉の三種の予告についても同様の事情を想定することができるはずである。

では、三種の物語に共通する構想類型とは何か。

文化五年から二十年以上も後、文政十三年〈一八三〇〉正月刊『八犬伝』第七輯下帙巻末に、「尼子九牛一毛伝」の予告が再び載った。

尼子九牛一毛伝初輯　八犬伝満備ののち引き続きて彫刻せん為に翁に乞へるもの也遠からず刊行すべし

これについて伊勢松坂の殿村篠斎から何らかの質問が寄せられたのだろう、同年正月二十八日付篠斎宛書簡の中で馬琴自身が次のように答えている。

尼子九牛一毛伝之事御尋被成候に付及御答候。この書名は昔年八犬伝を創し候頃両種共に思ひ付いづれにすべきかと再考いたしみ候処、牛より犬の方人に近く愛敬も有之候故八犬士にいたし候。其頃九牛伝の書名も著し置候処、三ヶ年前今の八犬伝の板元猶飽かで、八犬伝満尾の後引つゞき九牛伝をと懇望いたし候故、心もとなくは思ひ候へども任其意再書名を著し候事に御座候。この頃もし九牛伝をつゞり候はゞ八犬士とはいたく趣向をかえ可申と存候事に御座候。[7]

『八犬伝』原初構想を考えていたころ、それに見合う「書名」として「南総里見八犬伝」「尼子九牛一毛伝」（「七馬士伝」も）を思いつい

たが、「いづれにすべきかと再考」し、「牛より犬の方人に近く愛敬も有之」との理由から「八犬伝」を選んだと述べるわけである。この書簡の意味するところについて、かつて次のように考えたことがある[8]。

二(三)種の「書名」の間での迷いは、時代背景や人物群、つまりは「世界」の選択にも、さらには犬と人間の間に英雄を誕生させるという伝奇構想にも先行した。安房里見氏の事蹟も、「槃瓠説話」に依拠する犬に因む英雄誕生の趣向も必須ではなかった時点の、〈八犬士伝〉〈九牛士伝〉(あるいは〈七馬士伝〉)のいずれにでも発展しえた原初構想の中核にあったものとは、「八」や「九」(あるいは「七」)という数字が端的に示すような、主人公集団の領導する物語展開への志向に外ならなかった。「八犬士」の活躍する背景が里見氏であり、「九牛士」(や「七馬士」)のそれが尼子氏であってみれば、描かれる世界は、単なる書名の違いを超えて大きく異なるはずである。あるいは、物語の内実を規定するであろう(「馬」か)「犬」か「牛」かといった基本条件を考え合わせてもよい。それらのすべてに先行して馬琴の新たな作品創造の試みが志向したのは、主人公集団の離合集散の物語という構想だった。

文化五年正月には前年三月までに執筆された『椿説弓張月』後篇が既に刊行を見ている。源為朝個人を焦点にして、その一代記的構想によって書かれた『弓張月』に対して、いま試みようとするのは、集団構想による物語なのである[9]。

『島物語』『実実記』での「里見八犬士異伝」予告の翌年、文化六年十月刊の『旬伝実実記』下編に、八犬士物語のための新しい書名が現れる。

里見八犬出身奇伝 犬桜咲分草紙

『俳諧歳時記』(享和三年〈一八〇三〉三月刊)「犬桜」の項で編者馬琴は次のように解説する。

桜に似て桜にあらず故に犬といふすべて似て非なるものを犬といひ烏といふ犬さくら。犬蓼。烏瓜烏わうぎの類是也[10]

「犬桜」の語には「似て非なるもの」という否定的イメージがある(藍亭青藍が同書を増補した『増補俳諧歳時記栞草』[嘉永四年〈一八五一〉十一月刊]は、「みるにたらず」とか「いやし」とかの評語を加える[11])。おそらくそれ故にこの題名は放棄されたのだろうが、〈文化五年構想〉に連続して、八犬士の「咲分」――八犬士それぞれの「出身」のさまを描き「分」けようとの趣意を籠めた、銘々伝的集団小説構想を体現した題名ではあった。

三　集団小説の素材

集団主人公の物語という原初構想に範型を与えたのは、言うまでもなく、百八好漢の離合集散を語る『水滸伝』であろう。その翻案にふさわしい素材として取り上げたのが「里見八犬士」であり「尼子九牛士」であり「尼子七馬士」であった。

肇輯「八犬士伝序」は「里見八犬士」の典拠についてこう記す。

惜哉載レ筆者希二於当時一。唯坊間ノ軍記及槇氏字考。僅足レ識二其姓名一。至レ今無レ由レ見二其顚末一。

この「坊間軍記」は「回外剰筆」に挙げられる次の諸書にあたると見てよいであろう。

又里見の旧記は。其写本。坊間になし。只吾知る所をもていはゞ。里見記。里見九代記。房総治乱記。里見軍記あるのみ。

ただし、それらの中に「里見八犬士」の姓名は見出せず、「槇氏字考」すなわち槇島昭武編『書言字考』(『合類大節用集』)のみ次の記事を持つ(第十「数量門」)。

里見八犬士　犬山道節。犬塚信濃。犬田豊後。犬坂上野。犬飼源八。犬川荘助。犬江新兵衛。犬村大学〔12〕

『犬夷評判記』(文政元年〈一八一八〉六月刊)で三枝園(殿村篠斎)は、

われら八犬士の実録を見たる事なし。先年合類節用集とかいふものにて。その姓名をしるといへども。今は大かた忘れたり。〔13〕

と述べていて、「里見八犬士」の名辞があるいは読書人に共有された情報だったのかもしれないと思わせる。ともあれ、この「僅足識其姓名」程度のものが『八犬伝』構想のための基本資料なのであった。

この奇異な名のりの武士集団について、馬琴は必ずしも高い評価を与えてはいなかったようである。天保六年〈一八三五〉正月刊の第九輯上套「八犬伝第九輯自叙」に、「里見八犬士」の「実録」について述べるところがあり、そうした名のりは室町幕府の権威が失墜し諸侯が割拠する時代の野卑なる習俗であったという理解を示す。

毎レ莅二軍一陣一。為二勇名以知一。于敵一。改レ姓異レ名。欲レ不レ与二衆同一者間有レ之。所レ謂若二鵜一北六一花一氏。吉一見八一谷一党。里一見八一犬一士。尼一子七一馬一九牛十一勇一介。大一内十一杉一党。上一杉十五一山一党。朝一倉十八村一党。及山一中狼之介野一中牛助一。不レ遑二枚一挙一也。其一名所一載二軍一記一。事一実多不レ詳。素一是史闕一文歟。以レ類想二像此一。則暴一虎憑一河之勇已矣。

右とほぼ同内容の記事が文化八年〈一八一一〉正月刊の『燕石雑志』にも見える。

正親町院の永禄の比より、諸国の武士等に奇異なる名おほかり。その十が二三をいはゞ、山中鹿ノ介幸盛・秋宅庵ノ介・寺本生死ノ介・尤道理ノ介・藪中荊ノ介・小倉鼠ノ介・山上狼右衛門以上尼子ノ家臣、この余朝倉家の十八村党、河野家の十八森党、大内家の十本杉党、吉見家の八谷党、尼子家の九牛士、里見家の八犬士、枚挙に遑あらず。こはみな軍陣に臨て名告るとき敵にわが名をおぼえさせん為也とぞ。戦世には武備あまりありて文備なし。その名の野なる、心ざまの猛きさへ推てしらる。(巻一「苗字」)〔14〕

つまり、こうした名のりについての馬琴の評価にはほとんど変化がなかったと見てよい。さて、両者の間で集団名にはやや異同があるが、整理すると「宇喜多(鵜北)六花士」「尼子七馬士」「吉見八谷党」「尼子九牛士」「大内十本杉党」「尼子十勇十介」「上杉十五山党」「里見八犬士」「朝倉十八村党」「河野十八森党」の十種となる。これらはすべて『書言字考』に収載されている。おそらく馬琴はそこから武士集団

名を取り出し、このたびの物語構想に適したものとして「里見八犬士」「尼子九牛士」「尼子七馬士」の三種に絞り、次いで「里見八犬士」に決定したのである。――この過程からどのような構想を推定しうるだろうか。

集団名を次のように分類してみよう。

(1)草木類名型…「宇喜多六花士」「大内十本杉党」

(2)地勢用語型…「吉見八谷党」「上杉十五山党」「朝倉十八村党」「河野十八森党」

(3)動物名型…「尼子七馬士」「里見八犬士」「尼子九牛士」

馬川渡助などの「七馬士」、牛井呑右衛門などの「九牛士」は、姓と名とを言語遊戯的に組み合わせている点で寺本生死介・尤道理介などの「十勇十介」と共通するから、

(4)言語遊戯型…「尼子七馬士」「尼子九牛士」「尼子十勇十介」

に括ることもできる。これら四種の中で、(1)草木類名型・(2)地勢用語型ははじめから馬琴の取るところではなかった。(4)言語遊戯型の面白さは物語化の意欲を刺激しそうだが、そうした点では面白みのない「八犬士」も拾い上げられたところ、結果として「八犬士」が残ったところを見れば、「七馬士」「九牛士」の選出は(4)言語遊戯型としてではなかったであろう。馬琴は集団小説構想を具体化するのに馬・犬・牛の動物モチーフを持つ(3)動物名型の集団名がふさわしいと考えたと見なしうる。

さらに、前引の殿村篠斎宛書簡に「牛より犬の方人に近く愛敬も有

『書言字考』における〈〇〇士〉

宇喜多六花士　花房志摩。花木主膳。花田権兵衛。花岡伝兵衛。花津与左衛門。花村三右衛門

尼子七馬士　馬木彦右衛門。馬川渡助。馬飼舎人。馬塚登助。馬井汲助。馬路走助。馬山翔右衛門

吉見八谷党　谷村伊豆。谷尾大学。谷井美作。谷川弥五郎。谷戸甚三郎。谷月景蔵。谷野助五郎。谷橋弥四郎

里見八犬士　犬山道節。犬塚信濃。犬田豊後。犬阪上野。犬飼源八。犬川荘助。犬江新兵衛。犬村大学

尼子九牛士　牛尾遠江。牛田源五兵衛。牛岡草之助。牛川飛右衛門。牛井呑右衛門。牛尻踏右衛門。牛田鋤右衛門。牛引夫兵衛。牛飼糖右衛門

大内十本杉党　杉弾正。杉森下野。杉岡民部。上杉主水。杉下主馬。杉田豊前。杉山三右衛門。杉尾兵部。杉本蔵人。杉谷作右衛門

尼子十勇十介　山中鹿助。秋宅菴助。寺本生死介。尤道理助。今川鮎助。藪中荊助。横道兵庫助。小倉鼠助。深田泥助。植田早苗助

上杉十五山党　山尾筑前。山井主税。山下玄蕃。山菅権兵衛

朝倉十八村党　村上修理。村山尾張。村井若狭。村野源五郎。村菅新八。村尾兵庫。村木主水。村江源兵衛。村瀬主計。村戸新丞。村松藤左衛門。村須主殿。村田彦進。村本掃部。村神五太夫。村雲主税。村川勝十郎

河野十八森党　森山兵庫。森戸新右衛門。森岡兵部。森田刑部。森尾主水。森下出羽。森江淡路。森川隼人。森谷太郎兵衛。森本勘十郎。森塚新九郎。森村新兵衛。森中四郎兵衛。森藤源助。森坂刑部。森脇文五郎。森崎貞右衛門。森前若狭

之候故」とあったのに目を向けるならば、七か八か九かという数字の問題もさしあたって重要ではなかった。とすれば、次には動物モチーフの導入がどのような物語を可能にするのかという問題が浮上するはずである。「愛嬌」がある故の選択というのは、「も」字が示すように、付随的な理由と見るべきだろう。「牛より犬のかた人に近」いという「近さ」こそが重要だった。馬琴自身「九牛伝」を書くことはなかったが、その題材を譲られた為永春水[15]『尼子九牛七国士伝』（天保四年〈一八三三〉刊）が「九牛士」登場の根拠をどのように設定したかを参照してみよう。為永春水編『増補外題鑑』は、自作の概要を次のようにまとめている。

（論者注――尼子義久が）九牛の命を佐けたる仁術によつて牛の字を号としたる勇士集会して義久を補佐し中国に威を震ひ四海に名を挙るの美談……[16]

「九牛の命を佐けたる仁術」に対する善報として「牛」を名字に冠する勇士が登場する。しかし、牛と人間の交渉は淡く、伝奇性をもたらしうるものとはなっていないと言うべきであろう（ちなみに春水は「大内十杉士」をも『大内興隆十杉伝』に作品化しているが、そこでも、杉の大木を切り倒すことを取りやめたために十杉士が現れると、類似の発想を見せる）。馬琴にしても、牛と人間とを焦点とする伝奇構想には可能性を見出しがたかったのではないか。犬を選択した結果、〈高辛氏神話〉を介して〈異類婚的構想〉が導入されえた。〈異類婚的構想〉とどちらが先であったかは不明ながら、「犬」の選択は八犬士という英雄の出生に関わる伝奇的設定と不可分なのである。さらに言うならば、そこには後述する〈親子の主題〉も包含されていた。

しかしながら、〈文化五年構想〉に基づく作品化が実現を見ないまま、文化九年に至ると少しく異なる予告が現れるのである。

四　〈文化八年構想〉の意義

天保十年正月刊『八犬伝』第九輯中帙巻頭の「八犬伝第九輯中帙附言」に、肇輯刊行の文化十一年のこととして、こう言う。

本伝は。文化十一年甲戌の春。書賈平林堂弓張月の板元の為に。第一輯の腹稿を思ひ起せしに。平林堂頽齢既に七旬。長編の刊行做し果さん事。心許なしとて。そが夥計の書賈。山青堂に譲らんと請ひしかば。予その意に儘して。当時稿本五巻を。山青堂に取らしけり。

『近世物之本江戸作者部類』に馬琴はこうも記す。

又里見八犬伝は、文化八九年の比曲亭この新硯を発くに及て、これを弓張月の板元平林庄五郎に取らして鏤らせんと思ひしに、平林七旬に及ぶをもて長編の読本結局まで刊行心もとなしとて、これを書賈山崎平八に譲りけり。

前者は構想時期と実際の執筆時期とを混同した記述と見るべきだろう。「文化八九年の比」に『八犬伝』の「新硯を発」いたという『作者部類』の記事に対応すると思われる広告が、これも林美一の指摘したとおり馬琴作合巻中に見えるからである。すなわち、「文化重光協洽年

王居門花朝令節」（文化八年閏二月の意）脱稿（序）、「文化九年壬申春正月」刊行（刊記）の『浪薛桂夕潮』が、挿絵中の衝立に文化九年の「馬琴しん作よみ本」を次のように書き入れている。

○さんかつ後へん○里見七犬士伝○しち屋のくらこうへん○武者合竹馬の手綱○にまぜの記上下　右いづれも出はん[17]

また、「文化辛未年後ノ二月上旬」序、「九年壬申春正月」刊行（見返し）の『鳥籠山鸚鵡助剣』には、やはり挿絵中の襖に「馬琴作壬申春新版目録」が書き込まれ、その中に『けいせい道中双六』など五種の合巻、『昔語質屋庫』の後編である「利休箸／質屋庫／後編」とともに、「南柯の夢後へん／七犬士伝」が見える（図2）[18]。つまり、文化八年閏二月頃に序を執筆した合巻二種で、犬士伝の刊行予告がなされているのである。今これを〈文化八年構想〉と呼ぶことにするが、この時期にはどのような物語を計画していたのだろうか。

〈文化八年構想〉で目を引くのは書名を「里見七犬士伝」あるいは「七犬士伝」と改めたことである。この変更について、林美一は仇鼎散人『日本水滸伝』（安永六年〈一七七七〉刊）の影響を想定した[19]。しかし、北斗七星の転生として「北斗七英将」を登場させた該書の影響を受けたにせよ、それだけでは本来の「八犬士」を「七犬士」に改めた理由にならない。また高田衛は、日本古来の犬人伝承が「七」を定数とすることから「七犬士」に改めたが、後に犬士を聖化しうる「八」の根拠を見出したために「八犬士」に戻したのだと捉えた[20]。ともあれ、「文化九年壬申夏六月二十五日」の序、「文化九年壬申冬十二月吉日発販」〈刊記〉の『青砥藤綱摸稜案』後集の巻末広告では、

小説快事八犬伝　北斎画　近刻[21]

とすぐに〈八犬士〉にもどるのだから、〈七犬士構想〉自体は一年間ほどの迷いと見てよいだろう。それ故、ここでは〈八犬士〉か〈七犬士〉かの構想のゆらぎより、むしろ、「南柯の夢後へん」として構想されたこともあるという点のほうを重視したいのである。図2に明らかなとおり、「南柯の夢後へん」と「七犬士伝」は二行に記されるが、行頭が同じ高さでないから、二種を並記したと見るわけにはいかない。〈「南柯の夢後へん」としての「七犬士伝」〉の意と取らなければなるまい。

『三七全伝南柯夢』は好評だったらしく、馬琴自身、後には代表作の一つと自認しもする。その後編を執筆することになった事情について、『占夢南柯後記』（文化八年〈一八一一〉刊）序文に言う。

書賈木蘭堂。常南柯夢の続編を版せんと請。しかれども彼篇は。既に全く局を結て。絶て一物を遺さず。これを続とも労して功な

図2　『鳥籠山鸚鵡助剣』19ウ

し。夫流竭て飲をもとむるものは。新に井を穿にしかず。月没て明を求ものは。さらに燭を点するにしかず。不如々々。と推辞ども聴ず。（中略）遂に編を嗣。稿を脱して。もてその慾に充。題して南柯後記といふ。[22]

大樟の祟りを発端としつつ、三勝・半七・園花の三角関係を語ってきた『南柯夢』は、一夫二妻の結末によって諸葛藤に解決が与えられる。それとともに祟りの解消も図られた。「既に全く局を結びて。絶えて一物を遺さ」ぬ世界を再起動するために馬琴の採ったのは、三勝・半七・園花らによって動かされてきた『南柯夢』に対して『南柯後記』をその子供たち世代の物語として展開させる方法だった。親の世代の物語からこの世代の物語への連続性を確保するために、三勝・半七と男の名を共通にするお花・半七の情話（近松門左衛門『長町女腹切』）を典拠として選択し、さらに、巻之一の冒頭に約二十年の時間経過を総括する「南柯の接木」の章を置いた。『南柯夢』大団円では重層する縁組みによって物語世界の終熄を図ったのだったが、「南柯の接木」の中心にあるのは、『八犬伝』〈終熄部〉での八犬士の子供の〈交換〉と同種の発想に基づき、二代の半七たちを誕生させることであると言ってよい。

『南柯夢』→『南柯後記』の接続に関わるこの工夫によって、完結性のある物語とそれを受けつつ連続性を実現した後編とから成る、二部構成が成立した。こうした前・後編構想を改めて試みたのが『八犬伝』初期構想の雛型であったと考えることはできないだろうか。——

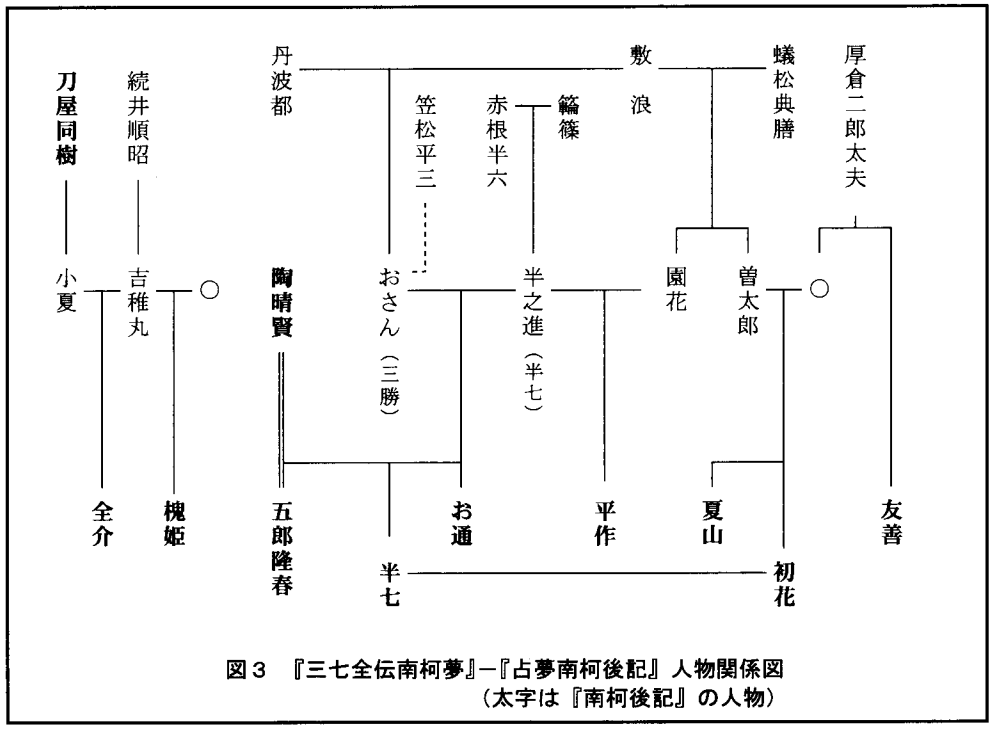

図３　『三七全伝南柯夢』—『占夢南柯後記』人物関係図
（太字は『南柯後記』の人物）

当初、「南柯の夢後へん」として「七犬士伝」を構想しようとした。が、『南柯夢』世界から〈犬〉を巡る物語を派生させることの困難さ故にそれは放棄され、実際には〈三勝半七〉〈お花半七〉の連結にしたがって『南柯後記』を書くこととなった。馬琴は〈犬〉の物語の母胎となりうる別の物語として伏姫物語を新たに作り、子の世代の物語としての八犬士列伝と対置される一編の長編物語を改めて構想した——と。

『南柯夢』-『南柯後記』のように世代を異にする二つの世界を対置させて物語を構築すること、あるいは、『八犬伝』のように〈発端部〉と〈列伝部〉とを対置させて物語を構築することは、『水滸伝』影響下の類似構想として想定することもできそうである。『南柯後記』が風流士・風流女の太刀の飛行という趣向から動きだすのだし、『八犬伝』が八玉飛散の趣向をもつこととは、ともに『水滸伝』発端を模したものである。もっとも『水滸伝』の場合はわずか一回の分量しか持たず、発端と列伝とが拮抗しうるようにはなっていなかった。「江戸の水滸伝」としての『八犬伝』の創意は、発端部と列伝部との対置に認めうるだろう。

五　『水滸伝』受容の規模

『水滸伝』の〈楔子→列伝〉の連続を範型としつつ、〈親の世代の物語→子の世代の物語〉の対置構造を意図したと想定してみた。では、『水滸伝』のどこまでを物語枠と意図したのだろうか。

完成体『八犬伝』の〈発端-列伝-八犬具足-京師の話説-大戦〉という構成は〈楔子-列伝-梁山泊結集-招安-大戦〉の『水滸伝』の構成に倣った形になってもいる。そこで、初めからこのような形で計画したとする解釈、さらには『水滸伝』を凌駕するような作品をねらったとの解釈すらなされたりもする。しかし、この作品が構想の変更・拡大を重ねて完成したことは疑いようもないのであって、少なくとも当初から『水滸伝』のような大作をねらっていたわけではないと見るべきである。このときに問題となるのは、馬琴が『水滸伝』の構成をどの程度まで取り込もうとしたかの問題である。

『八犬伝』以前の『水滸伝』翻案がその構成をどのように受容したか概観してみよう。

聚水庵壺游『湘中八雄伝』（明和五年〈一七六八〉刊）は朝夷義秀ら八勇士の物語である。源頼朝に亡ぼされた木曽義仲の落胤である義秀のもとに、義仲の遺臣やこれも頼朝のために討たれた源義経の遺臣、あるいは北条方の御家人を親の仇とねらう武士などが結集し、鎌倉幕府権力を壟断する北条氏との対決に至る構想だったと思われるが、そこに到達しないまま、梶原景時父子を討つところで終わる。第七の勇士までしか登場せず、おそらくは朝夷伝承に従って南島渡りを語るべき後編が予告されはするものの、未刊である。勇士の列伝から結集までを構想枠とすると見てよいのではないか。

伊丹椿園『女水滸伝』（天明三年〈一七八三〉刊）は、好漢を女賊集団に置き換えるのを基本構想とした。波羅遮国に抑留される盗賊集

団を救出するために生駒山の山塞を根拠地に財宝を盗みためていたその妻・娘たちが、南朝遺臣の妻らの加入とともに南朝義軍へと方針を転換し、折から帰国し捕らえられた夫たちを刑場から奪い去り、山塞に拠って足利幕府軍と対峙するまでを語る。後編の計画があったけれども、未刊。幕府軍との緒戦に勝利を収める挿話はあるが、『水滸伝』の大戦に比せられるほどのものではない。盗賊集団の結集で終わると見るべきだろう[23]。

振鷺亭主人『教訓いろは酔故伝』（寛政六年〈一七九四〉刊）は、『水滸伝』の代表的な挿話を男女の痴情に絡むエピソードに変換し、主人公男女が遍歴するその道筋上に連鎖させる。集団小説構想を採用していないために対応は明確でないのだが、不義者と思われていた二人が実は義・孝のために行動してきたことが明らかになり、帰参が叶うところで完結するのは、梁山泊結集か、せいぜい〈招安〉のあたりまでを想定したのだろう。高俅を写した岩永左衛門（高俅入道）の死によって帰参が叶うことになっているから、帰参後に大戦にあたる挿話が置かれるはずはなかった[24]。

曲亭馬琴『高尾船字文』（寛政七年〈一七九五〉刊）は、演劇の伊達騒動の世界に『水滸伝』の趣向をない交ぜたものとされるのだが、宋江にあたる足利頼兼や絹川谷蔵ら忠臣たちを梁山泊に擬した金花山に結集させ、奸臣たちとの決戦を予告するところで終わる。後編の予告はあるが、演劇あるいは実録に依拠した〈対決〉場が物語を実質的に終熄させるから、忠臣結集後の大戦は語り得ないであろう。

山東京伝『忠臣水滸伝』（寛政十一年〈一七九八〉～享和元年〈一八〇〇〉刊）は、『仮名手本忠臣蔵』を展開の軸として各段に『水滸伝』の趣向を付会したものである。京伝は、梁山泊一党であれ塩冶義士であれ、集団構想にも結集への過程にも関心を向けなかった。『忠臣蔵』の討入りを梁山泊軍が出陣する諸大戦に見立てられそうなのだが、石山寺での義士結集を語るにとどまり、討入りは天河屋義平の夢に置き換えて省略してしまうのである[25]。

以上のように、〈江戸の水滸伝〉は百八好漢の梁山泊結集までを一構想ととらえるのが一般的だった。多少の出入りはあっても、七十回本的構成をモデルとしたと見なしうるのである。『湘中八雄伝』『女水滸伝』『高尾船字文』は続編を予告するから、そこに大戦に対応する趣向を配するはずだったと考えられないではないが、しかし、後篇が書かれずじまいだったのは、そこにそれまでの盗賊集団が正義の大戦に勝利するといった物語を書くことの困難さがあったからであろうし、結集までで『水滸伝』写しが成ったと見なしたからであろう。馬琴が『水滸伝』を意識しつつ『八犬伝』の構想を立てたのだとしても、梁山泊結集以後の招安や外敵掃討・反乱軍鎮圧の大戦までを含むとは限らないのである。〈京師の話説〉や〈対関東管領大戦〉が初期構想に含まれていたと考えなければならない理由はない。

六　おわりに

『水滸伝』第一回は百八好漢登場の因を語る〈楔子〉にあたる。馬

琴はそれを独立性を持つ一編の物語へと拡張し、八犬士誕生の根拠を語る〈発端部〉（親の世代の物語）と位置付けた。それを受けて八犬士が登場し、それぞれの活躍を経て〈里見八犬士〉という集団を結成するに至る〈列伝部〉（子の世代の物語）を接続する。前後二部の対置によって長編物語を構築するというのが、『南総里見八犬伝』初期構想の大枠であった。

［1］谷崎潤一郎「饒舌録」（『改造』昭2・3。引用は『谷崎潤一郎全集』第20巻、昭57・12、中央公論社、による。）

［2］『近世物之本江戸作者部類』の引用は、木村三四吾編校『近世物之本江戸作者部類』（昭63・5、八木書店）の影印による。ただし、私に句読点・濁点等を施した。以下、同。

［3］林美一『秘板 八犬伝』（昭40・6、緑園書房）参照。

［4］『俊寛僧都嶋物語』の引用は、鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集』第八巻（平10・4、汲古書店）の影印による。以下同。

［5］『旬伝実実記』の引用は、鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集』第六巻（平9・1、汲古書店）の影印による。

［6］拙稿「〈巷談物〉の構想――馬琴読本と世話浄瑠璃――」（『菊田茂男教授退官記念日本文芸の潮流』平6・1、おうふう）

［7］引用は、三村清三郎編『馬琴翁書簡集』（昭8・5、文耕堂書店）による。ただし、私に句読点・濁点等を施した。

［8］拙稿「八犬士列伝の構想――『南総里見八犬伝』ノート」（三）――（『日本文芸論稿』第12・13合併号、昭58・7）参照。

［9］［8］の旧稿においては、［20］に後掲の高田衛論に倣い、『弓張月』も集団構想に成ったと記したが、いま考えを改める。

［10］『俳諧歳時記栞草』の引用は、栃木県立図書館蔵本による。

［11］『増補俳諧歳時記栞草』の引用は、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。

［12］『書言字考』の引用は、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。

［13］『犬夷評判記』の引用は、中野三敏編『江戸名物評判記集成』（昭62・6、岩波書店）所収の本文による。ただし、仮名表記を改めたところがある。

［14］『燕石雑志』の引用は、架蔵本による。ただし、私に句読点・濁点等を施した。

［15］その経緯については、横山邦治編『読本の世界―江戸と上方―』（昭和60・7、世界思想社）第一章「江戸読本の世界」第四節「天保・幕末期」（白石良夫執筆）参照。

［16］『増補外題鑑』の引用は、横山邦治編『増補外題鑑』

（〈和泉影印叢刊〉49、昭60・11、和泉書院刊）の影印による。

[17] 『浪薛桂夕潮』の引用は、国立国会図書館蔵本（ＤＶＤ復刻版『合巻　曲亭馬琴集』第三巻、フジミ書房）による。

[18] 『鳥籠山鸚鵡助剣』の引用は、国立国会図書館蔵本（ＤＶＤ復刻版『合巻　曲亭馬琴集』第三巻、フジミ書房）による。

[19] 林美一[3]前掲書参照。

[20] 高田衛『八犬伝の世界』（中公新書595、昭55・11）参照。

[21] 『青砥藤綱摸稜案』後集の引用は、鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集』第十三巻（平15・12、汲古書店）の影印による。

[22] 『占夢南柯後記』の引用は、宮城県立図書館伊達文庫蔵本による。

[23] 拙稿「『女水滸伝』論――「江戸の水滸伝」のうち――」（『国際文化研究科論集』第14号、平18・12）参照。

[24] 拙稿「『教訓いろは酔故伝』論――「江戸の水滸伝」のうち――」（『国際文化研究科論集』第4号、平8・12）参照。

[25] 拙稿「魔星の行方――『忠臣水滸伝』の長編構想――」（『国際文化研究科論集』第12号、平16・12）参照。

〈付記〉

1 『南総里見八犬伝』本文の引用は、国立国会図書館蔵本による。ただし、印刷の都合上、左訓、割注のふりがなは省いた。

2 本稿は、日本文芸研究会平成十六年第一回研究発表会（平成16年10月23日、於一関工業高等専門学校）において、同題で発表した際の発表草稿に加筆したものである。